
とある烈火の龍使い

ジョーカーアンデッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある烈火の龍使い

【Nコード】

N7147Z

【作者名】

ジョーカーアンデッド

【あらすじ】

もといた世界で城戸 真司はオーディンとの決着をつける前に死んだ。

だが、それは別の世界での物語の序章でしかなかった。
戦わなければ、生き残れない！

プロローグ（前書き）

勢いだけで書いてしまった。

まあ、いいや。

やれるところまでやろう。

龍騎は、原作と映画とTVスペシャルをこっちゃんにしています。

プロローグ

とある世界。

車に血だらけ倒れている男性とそれを抱えるように持ち上げている男がいる。

「やっとちよつとは答えらしいもんが…見つかったかもしんない…。」

でも…、なんか俺…、駄目かもしんない…。」

「俺さあ、昨日からずっと考えてて…、それでも、わかんなくてでも…、さっき思った…。」

やっぱり、ミラーワールドなんか閉じて…戦いを止めたいってきつと、スゲエ辛い思いしたり…させたり、すると思うけど、それでも、止めたい…。」

それは…正しいかどうかじゃなくて、俺も…、ライダーのひとりとして…。」

叶えたい願いが…つくれたんだ…。」

「じゃあ！

お前がかなえろよ！

ここで死ぬなよ！」

「ははっ…。」

まさか…、お前の口からそんなことが聞こえるなんて…。いい冥土の土産になるかな…。」

お前は、なるべく…生きる…！」

「おい！真司！真司—————！」

こうして、彼の人生は終わった。

そして、もう一つの『人生』を歩むことになる。

「ここは…?」

(自分は死んだはずだ…。)

「死後の世界は、ミラーワールドみたいなのか。」

「それは違うぞ。」

その問いに答えるように後ろから、最強の仮面ライダー、オーデインが真司のうしろにいた。

「いろいろ聞きたいことがあるけど、まず戦いはどうなった!？」

「浅倉は警察に射殺された。」

北岡は病死。

そして、蓮は私との戦いに勝ち、そのあと力尽きた。」

(そうか…。)と、蓮が死んだことを悲しがった。

「だが、私を含めて全員が脱落したため、再リセットとなるはずだった

が、なぜか、私とお前はその世界から拒絶されたい。

いわば、私とお前の存在が消去され、別の存在が私たちの代わりに

なったというわけだ。」

まったく、意味がわからないという風な感じ真司を気にせず、オ
ーデインは話を続ける。

「ただ、リュウガは、お前の分身ともいえる存在なので、
いまだにお前の中に居座っている。」

「自我はあるが、お前の意思で行動の制限や体の精神を入れ替え
るこゝろができる。」

そこは、理解できたのか、真司がしゃべった。

「えっ！ちよつと待てよ！俺たちは死んだんだろ！

そんなことしても、無駄じゃないのかよ！」

「いや、俺たちは死ぬ瞬間、私たちは神崎に救われ、
この狭間に取り残された。」

それだけであって、まだ死んだわけではない。」

「私は、こういうところに慣れているのでどういったこともない
が、

お前は、ミラーワールド同然。

リュウガがお前の中にいるからいいが、
いても、せいぜい1日しか滞在できない。」

「えっ！じゃあ、おれはどうなるんだよ！」

「いまから、お前を別の世界へ飛ばす。

ピンチの時は、手助けはしてやるが、

お前の好きにするがよい。」

と、言って取り出したのは召喚機ゴルトバイザーと『クロスベ
ント』と書かれたカードだった。

「では、またな。」

「え！話が急すぎてついていけないんですけど！ってエエエエエエ
！」

いきなり、ブラックホールが現れ、真司を吸い込んでいった。

「じゃあな。烈火の騎士よ。」

プロローグ（後書き）

コメント、待ってます。

都市伝説：カガミノナカカラコンイチワ（前書き）

レベルアップを使ったスキルアウトと戦う白井黒子の2週間前になります。

都市伝説：カガミノナカカラコンイチワ

とある昼下がりに。

人通りが少し多い通りでは、4人の少女が歩いてた。

「どうする？これから。」

「あつ！昨日新しい都市伝説見つけてきたんですよ。」

「そのようなのを聞いている暇はないんですわよ。」

「まあ、いいじゃないですか。」

上から、御坂 美琴、佐天 涙子、白井 黒子、初春 飾利。

学校こそ違うものの、親友だ。

「まあまあ、聞いてくださいよ。」

この学園都市内で鏡の中から、怪物が出てくるっていうのなんですよ、

最近になって、

頻繁に起きてる行方不明事件となにか関係があるんですわ、そんなこと。「そうですね…。」

「それに…。鏡の中から怪物っているはずないですわ。」

「ハア。まっ、いいんじゃない。気晴らしにいいんじゃない。」

「ええー！いけませんわ、おねえ様！」

そのような、危険が伴うことは、「はいはい。いないんでしょ。ならいいじゃない。」

でも…。」

「あれえ、意外と信じてるんじゃないの、黒子く〜く〜?」

「そんなことな…。」ピロピロピロ…」

「風紀委員からですわね。はい、もしもし。ええ、わかりました。」

「どうかしました?黒子さん。」

「迷子が出たそうで。面倒を見ると。」

「わかりました。佐天さんたちも行きますか?」

「きょうはいいや。」

「私も。」

「で、あなたが迷子ってわけのようですね。」

「まったく、いい大人が迷子ってどんな神経してるんだか。」

と、白井が言い放ったのはオレンジ色のジャケットを着たいい大

人だった。

「あ、あははは……。」

トホホ。「」

「お名前は？」

「城戸 真司です。」

「一応、なんでここに？」

「ええーと、住みに？」

「何で疑問形？お金はどのくらい持つてるのですか？」

「ええーと、一応50から100万ぐらいかなあ。」

「観光に来たわけではないんですね。」

「はあ。」

「あ、あとポケットの中にこんなものが入ってて……。」

と、言って取り出したのは『風紀委員』と書かれた腕輪と常盤台
中学役員と書かれた免許だった。

「なんであなたが持っているんですの!？」

「は？」

「それは限られた人しか！」ドカーーーーーン！

「一体なんですかの!?!」

「能力者が能力を使って…。」

見ると、初春は絶句していた。

「どうしたんですか？

初は…る…。」

「えっ、どうしたんですか。

は！」

そこにいたのは、巨大なクモ…ディスプレイター・リボンだった。

「そんな！まるで、佐天さんが言ってた都市伝説のようじゃないですか！

そんなことより、初春は批難してくださいまし。

あなたも！っていいない！

いったいどこに？」

「白井さん！あそこにさっきの男の人じゃ。」

と、いつて指さしたのは男…真司だった。

「はあ！なんですかの!！」

「逃げてください、逃げて！」

（なんで、いるんだ。それよりも倒すのが先決だ！）

そして、ポケットからカードデッキを取り出し叫んだ。

変身！！！！

都市伝説：カガミノナカカラコンイチワ（後書き）

コメント、待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7147z/>

とある烈火の龍使い

2011年12月24日10時46分発行